

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（六）第二編その3

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21732

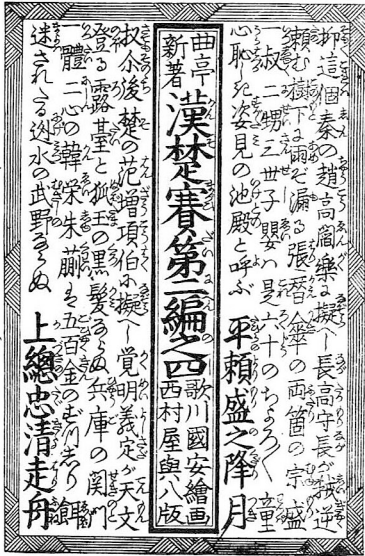
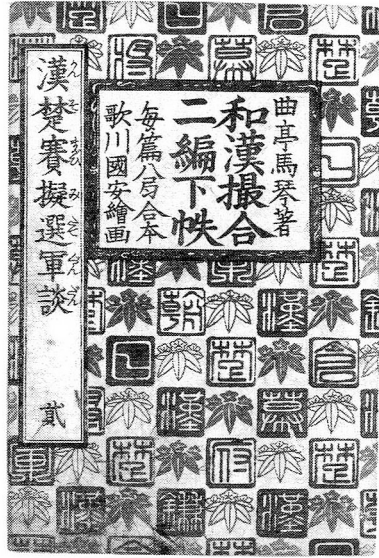
曲亭馬琴 『漢楚賽擬選軍談』 翻刻（六）——第二編その3——

神田 正行

凡例（摘録。詳細は本誌五三九号（平成31年）掲載の、本稿（一）参照）

- 一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除いて省略した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、話題が改まる位置に、内容を示す見出しを、◆印に続けてゴシック体で掲げた。
- 一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の詞書ことばがきは同じ頁の下段に翻字した。
- 一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本（〈133056。改装本）である。虫損や着彩、シミなどが目立たないよう、画像には最低限の修正を施した。

《第四冊 前表紙・同見返し》



(表紙)

曲亭馬琴著

和漢撮合／二編下帙

每篇八卷合本

歌川国安絵画

漢楚賽擬選軍談 式

(見返し)

抑 這個 秦の趙高・閻樂に擬へし 長高・守長が弑逆

頼む樹下に雨ぞ漏る 張替傘の両箇の宗盛

一叔二甥三世子嬰は是 六十のちよろ／＼童

心恥しき姿見の池殿と呼ぶ 平 頼盛之降月

曲亭 歌川国安絵画

新著 漢楚賽第二編之四 西村屋与八版

叔爾後 楚の范增・項伯に擬へし 覚明・義定が天文

登る露台と狐玉の 黒髪ならぬ兵庫の関門

一体二心の韓栄・朱剛は 五百金のずつしり餌

迷されたる逆水の武野ならぬ 上総忠清走舟

(七)

◆秦長高、宗盛を殺害する

頼朝【劉邦】すでに、親良【張良】・歴世【酈食其】、
 康頼【随何】・忠常【灌嬰】らの智者・勇士を得て、勢
 ひいよく著く、都を指して攻め上る程に、遠近の百姓
 ばら、道のほとりに出で迎へて、徳を仰ぎ物を参らせ、
 「早く平家を滅ぼして、この君の世になれかし」と、願
 はぬ者なんなかりける。

さる程に義仲は、北陸七ヶ国の軍兵、二十万騎を従へ
 て、既に近江路まで攻め上りしが、頼朝にはこと変はり
 て、万の上に甚だ手荒く、殺伐をのみ宗とせしかば、
 遠近の百姓ばら、恐れ戦きて逃げ隠れ、「この大将の氣
 嵩なる、只かの平家の悪逆に、劣りはせじ」とぞ眩きける。

か、りし程に都には、諸方の注進昼夜を分かたず、
 「義仲・頼朝東北より、数十万の大軍をもて、攻め近付
 きぬ」と告げしかば、秦長高【趙高】うち驚きて、今は
 その事を包むに由なく、虚病を構へ引籠もりて、久しく
 出仕せざるにより、事やうやくに隠れなく、宗盛【胡

亥】由を伝へ聞て、「こはそもいかに」とばかりに、驚き
 給ふこと大方ならず、「長高呼べ」とて呼ばせしかども、
 長高は病に託けて、得参らざりしかば、宗盛いたくうち
 腹立てて、近臣を▲右の下へ／▲左の上より詭使として、
 長高が宿所へ遣はし、「その身執権職をうけ給はりなが
 ら、賊徒の都へ近づくを、今までも押し隠し、こと既に
 迫るに及びて、虚病を構へ籠もりて、召しに応ぜざる
 はいかなる心ぞ。この義を申開くべし」と、嚴かに言は
 せしかば、長高恐れて答ふるに由なく、婿なりける、[次
 へ](31オ)／後藤兵衛守長【閻樂】と、嫡子秦木工太郎
 成高【趙高の弟趙成】を招き近付けて、忍びやかに語ら
 ふやう、「宗盛懦弱にして、大将の器にあらず。さるに
 より世の中乱れて、源氏の軍近付きたり。我かの人を
 おし片付けて、別に主君を立てんと欲す。古より、源平
 の両大将、帝の御守りたりしに、平治の逆乱より平家世
 を取つて、源氏はみな滅びたり。これにより源氏の輩、
 恨み骨髓に入りしより、遂に此大乱に及べり。我只源氏
 と和睦して、昔の如くなさんのみ。和殿ら、斯様々々に

はからひて、早くかの人をおし片付けよ。さらずは我々族滅せられん。疾く〜」と急がすにぞ、守長・成高一義に及ばず、にはかに腹心の軍兵、一千余人を語らふて、「源氏の大軍、既にはや乱れ入りたり」と偽り、六波羅の築地の内より、鬨を作り起こり立ちて、はや奥深く突いて入る、勢ひ当たるべくもあらざれば、近習の輩驚き騒ぎて、討たる、者少なからず。宗盛これに慌て惑ひて、逃げ隠れんとしてけるを、守長透かさず飛びかゝり、



(31) 才 長高、謀反を企てる

引捕らへて動かせず、眼を怒らし声ふり立てて、「御辺懦弱にして色を好み、国を治めざるにより、世の中いたく乱れたり。これにより、我執権の指図に従ひ、只今御辺をおし片付けて、源氏の恨みを宥むる」**▲右の中へ** **▲**左の上よりもの也。覚悟をせよ」と息巻けば、宗盛驚き悲しみて、「願ふは守長我が為に、執権に告げよかし。**○印へ** **○**印よりかくなるからは露ばかりも、浮世の事に望みはなし。身は墨染の法師となりて、一期を安く送らんのみ。命ばかりは助けよかし」と、言はせもあへず

高(長高)「切羽詰まりし我が身の難義。ばか大将をおし片付けて、まづ当分を逃る、了簡。**○** **○**随分抜かりのないやうに、手筈を必ず違へまいぞや。

守(守長)「案内知つたる奥御殿。敵寄せたりと呼ば、つて、込み入る手筈は奇妙々々。

成(成高)敵たふ奴らは皆殺し。ちつとも **▼** **▼** 早いが肝要々々。



(31ウ・32オ 守長、宗盛を討つ)

守長は、からからとあざ笑ひて、「この期に及びて未練の繰り言。たとひ執権に申すとも、今更 下の右へ 左の中より許さるべきにあらず。疾く 覚悟をし給へ」と、言ふより早く氷なす、刃を抜きて宗盛の、胸先ぐざと突き通せば、「あつ」とたまぎる声諸共に、血潮さつと迸りて、たちまちに息絶えにけり。されば心ある近習の輩は、この時に皆討ち死しつ、残る者どもはおめくと、成高・守長に従ひければ、事たちどころに鎮まりけり。

◆長高、誅殺される

かくて秦長高は、宗盛既に害せられて、こと鎮まりぬ

守 守長 「気の毒ながらつぶ 〇 〇 も

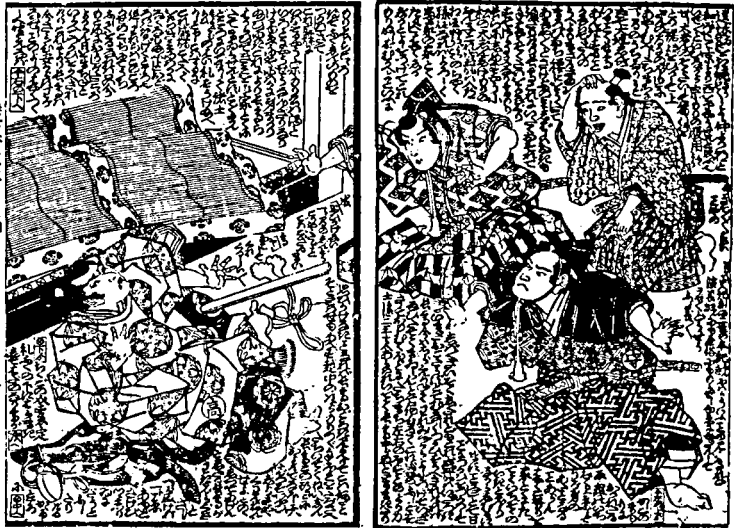
ろい最期だ、南無阿弥陀仏。

兵「どつこいしめた、皆来い。」

女房「テモ勿体ない、悲しや。」

成 成高 「かたつばしかなで斬りだぞ。

侍「敵と思ひし乱暴は、味方であつたか、口惜しい。」



(32ウ・33オ) 長高、上段から転げ落ちる

と聞て秘かに喜び、やがて宿所をたち出でて、六波羅の館に入り来たり、守長・成高らを、労ふてさて言ふやう、「我も一期の思ひ出に、大臣になり上りて、平家の次へ(31ウ・32オ)遺迹を相続し、義仲・頼朝と和睦して、京より西を、領せんと思ふ也。いで」と言ひながら、宗盛の服用せし、大臣の束帯して、笏を取り裾を引かして、上段の間に上りしに、怪しむべしたちまちに、一間の内鳴り動きて、大地震のいる如く、長高安坐する事かなはで、段の上より真逆さまに、転び落ち腰を打たして、「あなや」と叫ぶのみ、しばしは起きも得ざりけり。

侍「さて〜、恐いことやの。」

守(守長)「『史記』の二世の本紀には、かういふ事の見えたれど、演義にも通俗にも、漏らせし故に油断して、ヤヤ〜どうせう、不思議々々々。成(成高)「思ひがけない一間の震動。こりや只事ではござるまじ。」

高(長高)「ヤレ起こしてくれ、苦しい〜。」

長高これにいたく恐れて、手早く束帯をかなぐり捨て、更に又、成高・守長らに示すやう、「小松の大臣重盛の御子維盛【子嬰】は、入道相国の嫡孫なれば、よろしく当家の家督たるべし。早く云々と由を告げて、維盛主を迎へよ」と、言ふに守長ら心得て、腹心の者を遣はし、さて維盛に言はするやう、「宗盛公は酒と色とに、養生等閑なりける故にや、俄に身まかり給ひにき。これにより、長高ら計らひて、君を御家督に立て参らせんとす。疾く政所に出でまして、諸士の、拜礼を受け給へかし」と、申乞はするに維盛答へて、「叔父君俄に亡くなり給ふ由、驚き嘆く所也。但し我等は、この頃風邪の心地にて、うち臥してをるなれば、只今求めに応じがたし。快からん日を待ちね」と、応へて使ひを帰されけり。

これにより長高は、今更心安からず、「我がなせし事の由の、早く筑紫へ聞えなば、

▲右の下へ／＼▲左の上より

彼処の守りに置かれたる、平家の一族上京して、我が身の仇となる事あらん。早く維盛を家督に立てて、一族の憤り、なからしむるに増す事なし」とて、日毎に使ひ

を遣はして、しばし催促したれども、維盛は、「病着いまだ癒らず」とて、むなしく使ひを帰されければ、長高今は休えかねて、「我自ら由を告げて、誘ひ立てて参らん」とて、何心なく維盛の、臥所を指して赴く程に、たちまち左右の細殿より、力士二三十人現れ出でて、「長高やらぬ」と取り巻きたり。思ひがけなき事なれば、長高驚き見返りて、「こは何事ぞ」と問はせもあへず、越中次郎盛嗣【李畢】、手鉾を携へ立ち出でて、「佞人長高この期に及んで、なほ天罰を思ひ知らずや。観念せよ」と罵つて、逃げんとしたる長高が、脇腹ぐさと刺し貫けば、一声「あつ」と叫びつゝ、尻居にだうと臥したりける。

かゝる所に○中へ／＼○下より筑後介季定「筑後守家貞」を改めたものか、礼服の下に腹巻して、秦成高が次へ(32ウ・33オ)／＼首引さげ、忙はしく走り來つ、盛嗣に目礼して、上段の間にうち向かひ、「公達そこにをしますか。悪人ばらは悉く、討ち取つて候也」と、披露の声と諸共に、御簾をさつと巻き上げさせて、右の



(33ウ・34オ 長高、誅伐される)

方には三位維盛、左の方に清盛の弟、池田相公頼盛、中央には年若き、一人の大将ぞ立たりける。その時頼盛声高やかに、「逆臣長高息あらば、我が言ふ由を確かに聞け。汝が弑せし宗盛は、これ真の宗盛ならず。即ちこれなる大将こそ、これ真の宗盛なれ。今更言はんは無益に

季(季定)「秦(はたの)木工太ははや誅伐。○／○こ、らは「漢楚」の裏をゆく、宗盛公のもり替えは、何と奇妙であらふがの。

高(長高)「ダア引。

より(頼盛)「これぞ真の我が甥宗盛。秦の二世とは違ふぞよ。

つぐ(盛嗣)「守長を取り逃がして、「盛衰記」の筋に合はせる、天の配剂天の責め、思ひ知つたか、長高観念。

宗(真の宗盛)「我が身に代はりし○／○池殿の、御子の最期が痛ましい。

これ(維盛)「逆臣滅びてめでたしく。

似たれど、汝が目論見食ひ違ひたる、事の由を説き知らせん。

そもく元の入道相国の二男宗盛は、四十二の二つ子たるにより、親に崇りありといふ、俗説に従ひて、襦袢の内に捨てさせられ、頼盛仰を承りて、これを拾ひ取りけるに、あに料らんやその稚児は、早く人に拾はれて、つひにその行方を知らず。この事あからさまに披露せば、傳きの者の落ち度となりて、人数多罪せられん。いかにせましと思ひわびて、池の尼君の内意を伺ひ、その頃頼盛が生まれたる、妾腹の男子の、いまだ披露に及ばざる、嬰子のあるにより、即ちこれをかの捨てられし、我が兄清盛公の子也と偽り、頼盛しばし養ふて、宗盛と名付けつ、遂に我が兄に返し参らせしが、**▲右の中へ** **▲左の上より**当家の家督に立てられて、此度汝に害せられし、宗盛は即ちこれ也。人の為とはいひながら、兄を欺き我が子を以て、本家の世継ぎにしたる事、そら恐ろしく罪

■印へ **■印より**深ければ、我只手立てを巡らして、昔捨てられたる清盛公の、御子の行方を尋ねしに、「下京

なる傘張りに、六郎兵衛といふ者あり。その子六太郎といふ若人の面影は、清盛公によく似たり」と、告ぐる者あるにより、腹心の家の子を遣はして、その子の**●印の**

右へ **●印の中より**素性を問ひ質せしに、これ即ち捨て子にて、襦袢の内より六郎兵衛が、拾ひ取りて〇〇養育したる、その事正しき証拠あり。これ彼既に符合して、清盛公の御子なる事、疑ふべくもあらざれば、かの養ひ親六郎兵衛には、数多の金を取らせてその口を喋め、やがてその子を頼盛が、宿所へ迎へ忍ばしおきつ、折を得ばこれらの由を、披露せんと思ひしに、汝が逆心超過して、宗盛ならぬ宗盛は、弑せられたるにより、秘かに維盛と談合し、又季定 **■** **■**盛嗣らに機密を示して、汝を誅して悪を懲らし、我が子の仇を返すもの也。今ははやこれまで也、疾くく首を刎ねよかし」と、下知に従ふ盛嗣らは、長高が首**次へ**(33ウ・34オ) / うち落として、諸人にさし示せば、皆万歳とぞ祝しける。

しかるに後藤兵衛守長は、いち早く逃げ去りて、中將

□印へ **□印より**重衡の屋敷に赴き、佞弁をもて身の非

を飾りて、しきりに憐れみを求めしに、重衡愚かにしてその言葉に迷はされ、深く匿ひ置きけるが、この後生田の森の戦ひに、守長は重衡の、敵に捕らはるゝを救はずして、却つてその馬を盗み、早く逐電したれども、天罰つひに逃れずして、源氏の陣に生け捕られ、縛り首をぞ刎ねられける。

○かくて池頼盛は、盛嗣を討手の大将として、数多の兵を、長高が宿所へ遣はし、その妻子眷属を、一人も漏らさず搦め捕らしつゝ、やがて頭を刎ねられけり。されば又頼盛は、執権筑後介季定らと計らひて、此度迎へ取りたりける、真の宗盛を家督と定めて、世には内々の事を知らせず、もとのまゝにてありけるに、今の宗盛は幼きより、商人の家に人となりて、心ざま賤しく、しかも愚か
 ▲中へ／＼▲上よりなりければ、頼盛これを後ろ見して、万を取り行ひけり。これにより、偽宗盛の寵愛せられし、かの美女熊野を追ひ退けて、池田の郷へ帰されけり。行く末は知らねども、逆臣既に滅び失せて、賞罰道に適ふが如く、げに頼もしくぞ見えにける。

◆義仲、妹尾・難波の士卒を虐殺する

さる程に義仲の大軍、既に近江路まで進み来て、比叡山の衆徒を語らふに、山法師ら一味して、その勢三十万騎になりにけり。これにより義仲は、しばらく坂本に陣取りて、いまだ都に攻め入らず、夜毎に自ら夜回りして、用心大方ならざりけり。

か、りし程に、先に降参したりける、妹尾親子、難波経久ら「章邯・司馬欣・董翳」が軍兵四万余人あり、この者どもうち集ひて、忍びやかに語らふやう、「我々妹尾殿にそゝのかされて、木曾殿に従ひしは、大方ならぬ誤りなりき。木曾殿は手荒きのみ、命がけなる戦をしても、物一つ給はらず。それに引替へ頼朝公は、よく士卒を憐れみて、賞罰正しと人は言ふ也。悔しくもかの大将に、従はざりしは我々が、運の拙き故にこそ」と、託言がましく囁きけり。

義仲これを立聞して、俄に樋口次郎兼光「英布」を
 右の下へ／＼左の中より招き寄せ、「今宵かゝる事のありけるぞや。思ふに妹尾・難波が士卒らは、謀反を企つ



(347・35才 義仲 士卒らの会話を立ち聞く)

るとおぼえたり。汝六七万の軍兵をもて、這奴らを一人も漏らす事なく、討ち取るべし」と言ひつくるを、覚明【范增】驚き諫むれども、義仲怒りてこれを用ひず、つひに件の四万余人を、たちまち誅戮してければ、兼安・

兵「かういふ事と知つたなら、早く仕方もあつたのに、悔しい事をしたはいの。」

兵「佐殿は慈悲深いと、世の風聞も隣の宝。強いばかりでうまみのない、木曾殿は鬼殺し、頭痛の起るも無理ではないのさ。」

(左上 兼安ら、義仲に詫びる)

みつ(兼光)「別状もござらいで、さてくめでたう存じます。」

仲(義仲)「その驚きはさる事ながら、和殿たちに料はない。野心の士卒はこの通り。なほ忠勤を
○／○励まれよ。」

三人(経久・兼安・兼通)「お咎めなしと承つてやうやく安心。忝い義でござります。」

經久・兼通らは、うち驚きて慌て惑ひて、言葉等しく詫
 びしかば、義仲これを慰めて、「和殿らに罪はなし。か
 の士卒らのみ野心あり、これによりて誅したり。必ず驚
 くべからず」と、言ふに兼安・經久らは、僅かに心を安
 くしつ、**次へ**(34ウ・35オ)／なほ義仲に従ひけり。

◆頼朝、兵庫の城を落とす

○さる程に木曾の大軍、都へ入ると聞えしかば、平家は
 慌てふためきて、取る物も取りあへず、すなはち安徳天



(35ウ) 歴世、兵庫の城へ向かう

皇と、建礼門院を守り奉り、福原を指して落ちにけるが、
 一人後白河上皇は、いち早く逃れ出でて、平家の人々に
 伴はれ給はず、忍びて都にをはしましけり。

か、りし程に頼朝も、尾張路をうち発ちて、都に入ら
 んとし給ひしを、親良急に止めて言ふやう、「木曾殿既
 に坂本より、都へ討ち入らんとする程に、平家は一、支え
 も支え得ず、帝と女院を守り奉りて、摂津の福原へ、落
 ちたりと告ぐる者あり。いでや福原へ攻め入りて、早く
 平家を討ち果たし、帝を迎へ奉らば、その功木曾殿に十
 倍して、上皇の御喜びも、八入に増させ給ふべけれ。且
 先に、若宮の仰として、早く都へ入りたる者、武家の棟
 梁**▲下の右へ**／**▲上の左より**たるべしと、定めさせ給ひ
 しに候はずや。帝は今、福原にましますなれば、今はか
 の地こそ都なれ。伊勢路・大和路を経て摂津に赴き、疾

へ歴世、兵庫の城へ使ひに行く所。此絵の訳は次に
 見えたり。

ふる(歴世)「今度も上手くやりたいものだテ。

く福原を攻め落として、大功を立て給へかし」と、いと
 まめやかに諫むるにぞ、頼朝この義に従ふて、摂津国に
 討ち入りつゝ、兵庫まで攻めつけけるに、平家の侍大将、
 上総五郎兵衛忠清【韓榮・耿沛】、十万余騎を従へて、
 兵庫の城を守りたれば、容易く落つべうもあらざりけり。

(35ウ)

(八)

さる程に、東軍の先手の大将、源 近家、稲毛重成、足
 達藤九郎盛長、仁田四郎忠常、佐々木四郎高綱、加藤五
 景廉らは、数多の軍兵を従へて、兵庫の関【嶋関】を攻
 め撃ちけるに、関の大将、上総五郎兵衛忠清【韓榮】、
 越中次郎盛嗣【朱剱】ら、十万余騎の新手を以て、厳し
 く防ぎ戦ひければ、容易く落つべくも見えざりけり。そ
 の時齋宮次官親良【張良】、秘かに頼朝【劉邦】に申す
 やう、「味方の十万余騎をもて、敵の十万余騎を攻めな
 ば、主客の勢ひ異にして、勝ちを取ることに難かるべし。
 しばらく攻め口を退けて、森林の内に、旗指物を多く立
 て置き、大軍四方より攻め掛る、勢ひを示して敵を疲ら
 し、歴世【酈食其】・康頼【随何】の如き、弁舌の者を
 遣はして、斯様々々に言はせなば、かの城たちまち落つ
 べき也」と、言ふに頼朝領きて、歴世・康頼を招き近付
 け、事云々と示し給ふに、歴世は昔忠清と、一面の交は
 りあり、「参るべし」と言ふに任せ、即ち件の使ひとし
 て、兵庫の関へ遣はしけり。

かくて壹岐庄二歴世は、供人わづかに、両三人を従へて、兵庫の城に赴き、城の大將忠清に、対面してさて言ふやう、「平家の武徳衰へて、滅びん事遠からず。何ぞ早く兵衛佐殿に従ふて、士卒の必死を救ひ給はざる。たとへ
 ▲右の下へ／＼ ▲右の上よりしはは防ぐとも、木曾殿も亦押し寄せ来て、諸方の源氏一手にならば、石もて玉子を圧す如く、敗れんこと疑ひなし。疾く／＼思案をし給へ」と、言はれて忠清頭を傾け、「我もその義を思



(36才 歴世、忠清を説く)

へども、盛嗣をはじめとして、○左へ／＼○右より士卒の

心測りがたし。とくと談合を遂げて後、返答に及ぶべ

し」と、言ふに歴世は次へ(36才)／＼続き心得て、その

日はまづ旅宿に退き、次の日又、忠清に対面して、「昨日勧めつる事は、いかゞ決着し給ひしぞ」と、問へば忠

清「さればとよ。盛嗣を□／＼ははじめとして、降参せじ

と言ふ者は多く、降参せんと言ふ者は、わづかに三つが

一つ也。こゝをもて尊命に、従ひがたし」と辞むにぞ、

歴世聞て「しかりとも、御辺の志は佐殿も、頼もしく思

ひ給へり。これにより些かながら、此品々を贈られたり。

受け納め給へかし」と、言ふに忠清頭をうち振り、「佐

忠(忠清)「段々の御親切、しからば預かり置きま

せう。和睦に及ぶ義もござらば、その節御礼を

申すでござらふ。何分よろしく頼み入ります。

ふる(歴世)「そのもと様のお志を、察しられての

贈り物、お受けなされて拙者も安心。しからば

お暇申しませう。



(36ウ・37オ 頼朝、兵庫の城を攻略)

殿は怨敵なり。 右の下へ / 左の上より この賜物を受

けられんや」と、辞むを歴世は押し返して、「今この品を受け給はずは、これ又恨みを結ぶなり。後に城の危うき時、何を和睦の縁にせん。佐殿は仁義の君也。期に臨んで和睦を求めば、受け引かれんこと疑ひなし。辞む事かは」と説き諭せば、忠清この義に従ふて、「然らば和睦の整ふ日まで、仮に預かり置くべし」とて、本領安堵の御教書と、種々の引出物を、そがま、に受け納めしか

頼朝 忠常 景廉 義盛

皆々「戦に加藤五」を効かせる「和田・

仁田。よい算段であらうがの。

高「高綱」四つ目殺しでしめたぞく。

兵「あんまり御念が入り過ぎて、腸」を効かせる「痛み入りますてや。突いたら早くお放し〜。

忠「忠清」一番よもやにかけられた。モウかうなつては逃げるが勝ちだぞ。

ば、歴世はやがて別れを告げて、源氏の陣へ帰りけり。

○これよりして城方は、和睦を頼み油断して、戦ふの心なく、士卒はさら也大将さへ、日毎に酒盛りしてありしかば、齋宮次官親良、頼朝に説き勧め、熊谷次郎直実と、平山武者所次へ(36ウ・37オ)／季重【薛欧・陳沛】に、各々五六千の軍兵を授けて、「兵庫の城の搦手より、攻めかゝれ」とてこれを遣はし、合図の日にもなりしかば、源氏の大軍雲霞の如く、関をどつと作りかけて、城の大手より攻めかゝれば、平家の軍兵驚き騒ぎ立て、「こはそもいかに」とばかりに、周章大方ならざりけり。しかれども忠清・盛嗣は、しきりに士卒を罵り励まして、しばらく防ぎ戦ふ程に、思ひがけなき搦手より、源氏の軍兵乱れ入て、はやあちこちに火をかけた、煙の内より斬つて回れば、平家はいよいよ度を失ふて、皆我先にと落ちんとしつゝ、討たる、者少なからず。忠清も盛嗣も、散々に討ちなされ、やうやく逃れ出でたれども、恥ぢて福原へは赴かず、浦曲の舟にうち乗りて、筑紫を指して走りけり。

◆頼朝、福原に入る

○されば又、福原の都には、頼朝の大軍既にはや、兵庫の関をうち破りて、乱れ入ぬと聞えしかば、大臣宗盛驚き恐れて、防ぎ戦はんとする擬勢もなく、帝と女院を守り奉り、平家の一族諸共に、西を指してぞ逃げたりける。

既にして頼朝は、兵庫の城を攻め落としつゝ、はや福原まで攻めつけ給ふに、平家の歴々は皆逃げ失せて、敵たふ者は一人もあらず。時に宗盛の後ろ見として、平家第一の▲▲／▲▲人なりける、池・重相頼盛「ここでは三世子嬰」のみ、なほ福原に留まりて、平家の祭祀を絶やさじと、思ふばかりにおめくくと、その家臣、弥平兵衛宗清【季畢】らを従へて、
 ○右の下へ／○左の上より道のほとりに出で迎へ、降参をしてければ、源氏の勇士らこれを見て、「誅し給へ」と勧めしを、頼朝聞かず頭を振りて、「いかでかはさる事をせん。昔平治の兵乱に、我は虜となりし時、頼盛の母池・禪尼の、情けによりて一命を、助けられたる洪恩あり。たとへその事あらずとも、降参しつる者を殺すは、不祥これより甚だしきはなし。よく



(37ウ・38才 頼盛、頼朝に降る)

弥(宗遣)「昔は我らが生け捕りし、佐殿におめ

くと、降参するも不甲斐ない、主に従ふこの身の不運。是非もない世の盛衰記(▼)「盛衰」に「(源平)盛衰記」を効かせる」じやなア。

より(頼盛)「降参の場に至つて、三世子嬰の役廻り。これで和漢の(■)■本文に、合はせるといふ作者の魂胆。役不足も○/○申されず。御推量なされませ。

里老「結構なる思し召し。ありがたう存じ奉ります。女「あんまりたほが少ないから、出る幕でもない私らまで、並ばせておかれます。「傾城水滸伝」と搗き混ぜたら、こんな目にも遭ふまいのに、ホンニ辛い事じやのふ。

朝(頼朝)「稲毛重成心得て、池殿を勞り申せよ。弥平兵衛も遠慮なく、用事あらば重成に、○/○何なりとも申されよ。

時(時政)「村長どもも、立ちませい〜。

重成 広元 (▼)大江広元

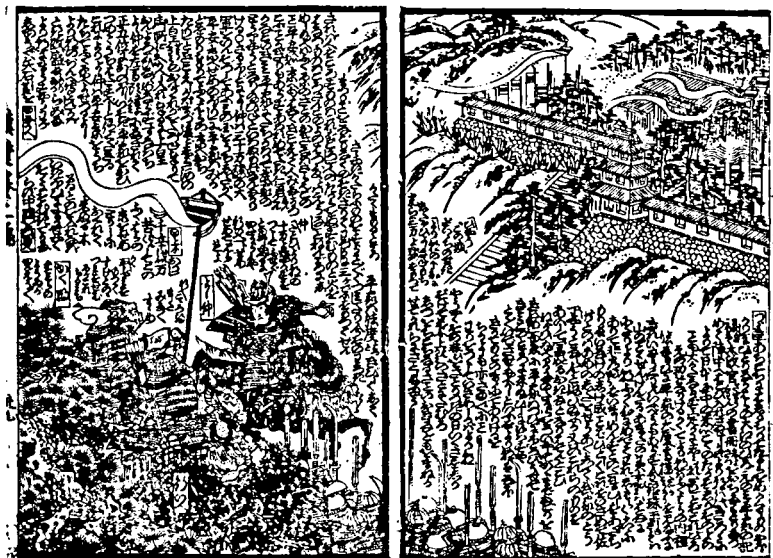
く「勞り參らせよ」とて、頼盛に對面し、「上皇ならびに信濃宮に、申し宥めて御命を、助けんと思ふ也。かくは御心安かるべし」と、懇ろに慰めて、弥平兵衛宗清らをも、等閑ならずもてなしつ、そがま、陣中に留め給ひけり。この時源氏の士卒らは、**〔次へ〕**(37ウ・38オ)／**〔続き〕**あちこちに走り散りて、宝を目がくる者多かりしに、一人中原の大江広元「蕭何」のみ、平家の記録、太政官の、書冊を落ちなく取り集めて、陣中へ運び入れさせしかば、頼朝はこの記録によりて、日本国中の米穀の高を知り、その余の事も大方ならず、定かに知られたりしとぞ、これ広元の功なりける。

かくて頼朝は福原の、内裡並びに平家の、大廈高樓を見給ふに、綺麗壯觀言ふべうもあらず。金銀珠玉は山の如く、嬋娟たる、数多の美女は花に似たり。頼朝深く心に愛でて、「我しばらく此処にありて、非常を誡めんず」と宣ひしを、足達盛長・稻毛重成**〔樊噲〕**、言葉等しくこれを諫めて、「佐殿は、天の下を掌握して、武家の棟梁とならんと思ひ給ふか、又只これらの物を愛して、

富る翁となり果てんと、冀ひ給へるか。国の宝を費やし、かくまで奢りを極めし故に、平家はつひに滅び失せ、君この所に、来給ひしに候はずや。疾く／＼出でさせ給へかし」と、言ふを頼朝はなほ聞かで、もとのまゝにてありけるを、親良も亦様々に、理を尽くして諫めしかば、頼朝やうやくその非を悟り、次の日戦を退けて、葉上の郷**〔霸王〕**に屯しつ、遠近なる、里の翁どもを招かせて、彼らに諭し給ふやう、「平家は法度厳しくして、囁き語らふ者をすら、悉く罪したり。今その悪き政を、名残りなく除き去りて、わづかに三ヶ条をもつてせん。されば人を殺す者はこれを殺し、人の宝を盗む者と、火を放つ者は殺さん。この余の法度は用なし」と、懇ろに示し給へば、福原の郷の翁はさら也、このこと平安京へも早く聞こえて、人皆喜ぶこと限りもあらず、「あはれめでたき仁君かな。この君平家にたち代はりて、武家の棟梁となり給ひね」と、言はぬ者ななかりける。

◆義仲、兵庫に迫る

○さる程に義仲は、三十万騎の、大軍を引率して、近江



(38ウ・39オ) 義仲、兵庫の城を窺つ

国を討ち従へ、平安京へ攻め上りしに、平家は帝を守り奉りて、福原の京へ、落ちたりしと聞こえしかば、まづ後白河の上皇の、御隠れ家を尋ね奉りて、御所へ歸し入れ奉るに、上皇御喜び斜めならず、即ち義仲を左馬頭になされて、正五位におし上し、「急ぎ平家を追ひ詰めて、討ち果たすべし」と仰下さる。これにより義仲は、平安京をうち発ちて、福原へ寄せつる由、頼朝の陣へ聞えしかば、時政・盛長ら、皆頼朝に申すやう、「我が主従矢

へ兵庫の城第一の関

へ頼朝の下知に従ひ、義実【▼岡崎】・茂光【▼工

藤】ら、三万余騎をもつて堅く守る所

仲(義仲)「たとひ頼朝の十万余騎、数を尽くして

防ぐとも、押し破るに難からんや。行家、一攻め

攻めて見られよ。

行(行家)「心得ました、皆々進め。

かく(寛明)「矢文をもつて佐殿の、罪を責むるが

これ近道。▲／▲そこらの用意が肝要々々。

石を **○中へ** **○上より** 冒し、千辛万苦して、この福原の

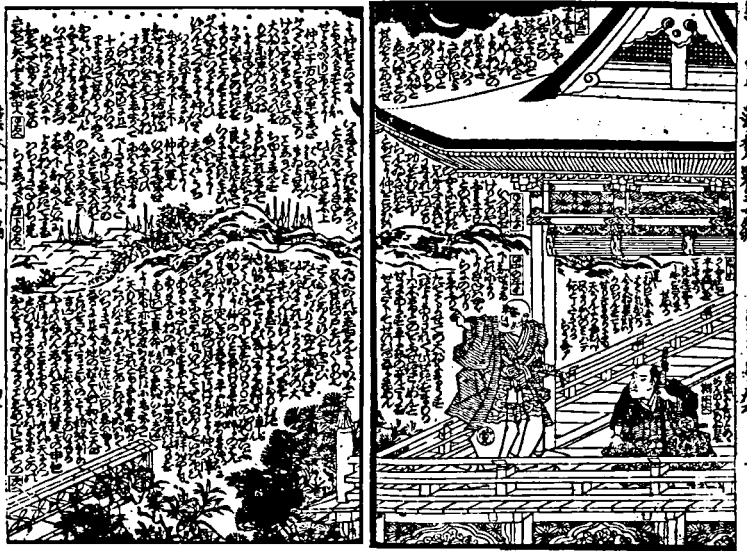
京を攻め取りしに、遅れて来ぬる木曾殿を入れなば、勢ひに任せ約束に背きて、必ず中国を **次へ** (38ウ・39オ)

／ **続**き領せらるべし。早く兵庫の関を固めて、防がせ給へ」と勧めしかば、頼朝この義に従ひて、岡崎の四郎義実と、狩野介茂光を大将として、兵庫の関を固めさせ、「義仲そこに至るとも、入るべからず」と下知せらる。

か、りし程に、義仲は三十万の、大軍を従へて、兵庫まで寄せたりけるに、たちまち先手の大將行家より使ひをもて、「東軍の大將義実・茂光ら、固く兵庫の関を守りて、通す事を肯んぜず。いか、計らひ候はん」と、告ぐるに義仲いたく怒りて、「只速やかに押し破りて、通るべし」とぞ下知せらる、を、大夫坊覚明諫めて、「頼朝既に、津の国を得たりしに、且十万の兵あり。怒りに任して攻め撃ち給はゞ、おそらくは過ちあらん。斯様々々に計らせ給へ」と、言ふに義仲怒りを鎮めて、さらに行家に下知を伝へ、緩く城を攻めさせて、矢文を城中へ **○右へ** **○左の上より** 射入れさせせけり。その矢文に、

「佐殿は先約に背き、兄弟たる義を忘れて、一人功を貪らん為か、関を閉ぢて義仲を、拒むは如何なる道理ぞや」云々と書きたるを、義実ら拾ひ取りて、葉上の陣へ参らせつゝ、事云々と注進す。

頼朝これを見てうち驚き、親良を招き寄せて、「如何にすべき」と問ひ給へば、親良しばらくうち案じて、「義仲は大軍也。一旦防がせ給ふとも、つひには撃ち破らるべし。さる時は味方危うし。まづかの人を此方へ入れて、後に又仕方はあるべし。この義を早く下知し給へ」と、言ふに頼朝領きて、すなはち義実・茂光らに、云々と **下**の右へ **中**の左より下知せらる。これにより義実は、櫓に上り声ふり立てて、「寄せ手の大將に申すべき由あり。我々此関を守りしは、木曾殿を防ぎ止めんとせしにあらざ、平家の残党を詮索して、静謐ならしめん為也。か、れば主君に何ふて、只今関の戸を開くも也。疾く御通り候へ」と、二度三度呼ばりて、やがて城戸を開きける。これにより木曾の大軍、先陣後陣うち続き、兵庫を過り、福原に赴き、嶋の港 **鴻門** と



(39ウ・40オ 覚明、天文を見る)

呼びなしたる、浜村に陣取つて、人馬の足を休めけり。
 ◆覚明、天文を見て危ぶむ

○この夜大夫坊覚明は、義仲の従兄弟なりける、長瀬判官代義定「項伯」を伴ふて、平家の露台にうち上り、この夜の月を賞しけるが、義仲の陣の方には、殺気陰々となち上りて、勢ひあるに似たれども、未遂げがたき不祥の気あり。又頼朝の陣の方には、将星光をあらはして、真命の象いちじるし。義定も亦、その友親良に従ふて、天文を諳んじたれども、なほ覚明が詳しきに及ばず。

その時覚明は、逐一に指し示して、「佐殿は英雄なるに、且今地の利と人の和と、天の時をさへ、得たる事か

定(義定)「げに佐殿の陣の方は、将星▲上へ／▲

下より赫奕として、本官を照らしたり。先生さやうじやござりませぬか。

覚(覚明)「昔東國に白氣起り、今又将星かの陣を照らせり。ともかくにも天運に、適ひは只頼朝のみ。ハテ何としたらよからうなア。

くの如し。始終の吉凶を論する時は、木曾殿いかでか及び給はん。しかれども、昔楚の申包胥が言葉にも、人多ければ天に勝つと、言ひけることのあるものを、我木曾殿の恩を受けたり、謀はかりごとを巡らして、後の次のちへ(39ウ・40才)／愁ひを除かんのみ。今宵の事は某それがしと、御辺の他に知る者なし。ゆめ秘すべし」と囁きつ、夜更けて陣中へぞ帰りける。



(40ウ 双通の密使来たる)

◆内間田幸弥、義仲に密告

○かくてその次の日に、頼朝の後陣の大将、内間田幸弥うちまたたけや双通ふたつら「曹無傷」といふ者、秘かに使ひを、木曾の陣へ遣はして、一通の密書を送り、「頼朝先約あればとて、自ら武家の棟梁たらんと、欲する事しきり也。御用心あるべし」と、▲下へ／▲上よりこと詳らかに告げしかば、義仲怒りに堪へずして、速やかに葉上の陣を、攻め破らんと息巻きしを、大夫坊覚明諫めて、夜討ちにせんとぞ議したりける。

これより末は、鴻門かうもんの会に擬ふ大場にして、最も興あるべけれども、丁数限りあれば、これを此編の終はりと

仲(義仲)「かゝる証拠のあるからは、疾く押し奇

せん、用意々々。

覚(覚明)「御憤りはさることながら、某それがしいさ、か謀はかりごとあり。まづ／＼お控へ下さりませ。

(密使)「御勢を寄せられ給ひなば、双通裏切り○
／＼仕らん、心構へでござります。

す。除(▼)「余」の誤カ」は第三編に著すべし。又来る春を待ち給へ。めでたしく。

馬琴作

国安画

〔浄書〕 金川

※左上 売薬広告

家伝神女湯〔婦人血の道諸病の妙薬〕

一包代百銅

近年薬種高直といへども、弥薬種を選び、功能を違はざらしむ。利の為にのみせざればなり。

精製奇応丸

〔大包代式朱 中包代一匁五分〕 小包代五分

薬種を選び、製方を詳らかにし、分量家伝の加減をもつてす。

この故に、その功百倍神の如し。

熊胆黒丸子〔熊の胆汁を以丸す。多く糊をまじへず〕 一包代五分

婦人つぎ虫の妙薬

一包六十四銅、半包三十二銅

製薬本家〔神田神明下同朋町東横丁〕

滝沢氏

弘 所 元飯田町中坂下南側四方の向

たき沢氏

取次所 西国横山丁二丁目

大坂屋半蔵

(40ウ)

▼第四冊巻末の「書林永寿堂新刻目録」一丁、ならびに後表紙封面の奥目録「文政十二己丑新雕絵草紙」は、本作初編第二冊と同じ。本誌五四三号一二、三頁参照。

《第二編解題》

一 執筆の経過

文政十一年六月十四日、馬琴は「通俗漢楚軍談」第二冊を繕いて、「漢楚賽擬選軍談」第二編の腹稿を練りはじめた。翌日には通俗本の第三冊に目を通す一方、筆工の中川金兵衛(谷金川)に、「二編綴り見合せの為」、初編巻七・八の稿本を、ひとたび返送するよう求めている。そして翌十六日、「擬選軍談」第二編が起筆され、序文ならびに口絵・画賛の草稿が作成された。以後、同作初編の校合と並行して、同月二十四日まで第二編の上帙(前半二十丁)を執筆し、翌日から取りかかった同編下帙は、七月三日に「皆出来」としている。翌四日には八の巻(第三十六〜四十四丁)に若干の補筆が加えられ、五日には袋の画稿が作成されて、「漢楚賽」第二編の稿本が全備した。

中川金兵衛による浄書は、七月十日に「一の巻」五丁

分が馬琴の許へ届けられ、以後八月二十七日までの期間に、全八巻四十丁の校合が行われている。

その後、十月の初編売り出しに続けて、第二編の刊刻作業は、以下のような経過で遂行された。

○上帙 11月25・26日初校、同月晦日再校、12月6

日売出。

○下帙 12月8日初校、10日再校、12日売出。

二 「漢楚軍談」の翻案

ここでは初編と同様に、本作と「漢楚軍談」との対応関係を整理しつつ、若干の補説を行いたい。「漢楚賽」第二編のそれぞれの章段について、本稿で施した見出しを掲げ、その下に「漢楚軍談」の対応する章段名(初出以外は短縮)を記した。見出しの記号を「◇」としたものは、「源平盛衰記」などに由来する、本作独自の展開である。「漢楚軍談」の章段には丸数字(①②……)を付して、各巻における配置を示した。

・上帙上(第一冊)

◆頼朝、信濃宮のもとへ伺候する

巻一⑥「范増献策立楚後」

◆信濃宮、頼朝・義仲を競わせる

巻二⑤「章邯避禍降項羽」

項羽と劉邦との間に競合関係を生じさせる、楚懷王の「誰ニテモ早ク咸陽へ入タル者ヲ王トシ、後ニ入モノヲ臣トセン」という言葉は、原作では巻二の末尾(三十丁表)に見える。馬琴はこの一件を引き上げて本編の冒頭に配し、これ以降の源平合戦に、「武家の棟梁」を目指す頼朝・義仲の競り合いを設定したのである。

◇藤原宗義、信濃宮に出仕

宗義むねよしは架空の人物で、原作の宋義に対応するが、この宋義が懐王(本作の信濃宮)に出仕した事情は、「漢楚軍談」には記されていない。

◇頼朝・義仲、おのおの進軍する

富士川の戦い、ならびに篠原合戦が略述される。本作では、両合戦が相次いで起こったように記されているが、

前者は治承四年(一一八〇)稿者は寿永二年(一一八三)の出来事である。

◇実盛奮戦

老齢ながら髪を染めて参陣した斎藤実盛の最期は、「平家物語」巻七「実盛最後」や「源平盛衰記」巻三十「真盛被討」に描かれる。なお、実盛が着した「錦の直垂」について、馬琴は「大将維盛」から下賜されたものとしているが(九丁表)、「平家」や「盛衰記」では宗盛の賜物である。

◆妹尾兼安、源氏討伐に向かう

巻二①「章邯劫秦破項梁」

妹尾(瀬尾)兼康を「兼安」としたのは、徳川將軍家、特に家康に憚った所為と思われる。同人は、礪波山の戦いに破れて義仲に降ったので、原作の章邯に擬されたのであろう。

兼安の副将として従軍する「桜間介良遠」(原作の李由に相当)は、「源平盛衰記」巻四十二「勝浦合戦付勝磨」における、「阿波民部大夫ノ弟二、桜間介良遠」と

いう記述に基づく。「盛衰記」は阿波民部を「成良」としており(巻第三十七「平次景高入城」など)、この点でも「漢楚賽」と合致する。「平家物語」巻十一「勝浦合戦」では、「阿波民部重能が弟、桜間介良遠」となっている。

同じく副将の難波小次郎経久(原作の董翳)は、すでに初編十一丁表にも登場しており、ここでは「難波次郎経俊が子」「心利たる若者」と説明される。

◆兼安、義仲軍と対陣

巻二①「章邯劫秦」

・上峽下(第二冊)

◆中原兼遠、命を落とす

巻二①「章邯劫秦」

寿永二年(一一八三)の火打城(燧城。福井県南条郡)における戦いは、平維盛による在地豪族の討伐であり、ここに義仲や兼遠は参陣していない(「盛衰記」巻二十八「源氏落燧城」)。この戦いで平家方に内通したのが、「平泉寺長史齊明」で、馬琴はこの荒法師「才明」に、中原兼遠を討たせたのである。

原作『漢楚軍談』において、兼遠に対応する項梁を討

ち取るのは、秦の大将孫勝であるが、同人は以後作中に現われることがない。一方、本作の才明は『盛衰記』の斉明に擬えて、越中における戦闘で巴に捕らわれ、義仲の命で錆び刀により斬首された(十七丁)。十六丁裏・十七丁表の画面における、以下のような才明の言葉は、右の事情を踏まえたものである。

才「漢楚」の孫勝は、項梁を突き殺しても、どう

なつたことやら、後の事は知れかねるに、「盛

衰記」の筋に合はされては、おしまい〜。

なお、この一段の中で、奥九郎(義経の変名)の献策を聞き入れなかった兼遠に対して、大夫坊覚明が諫言を行っている(十二丁裏・十二丁表)。原作『漢楚軍談』では、この局面で項梁を諫めるのは、次の段で義仲に討たれる宋義であり、覚明に相当する范増ではない。

◆義仲、宗義を討つ 巻二②「項羽殺宋義救趙」

宗義が義仲に討たれるのは、越後の陣中においてであるが、原作の宋義は安陽(河南省安陽市)で項羽に首を

刎ねられている。

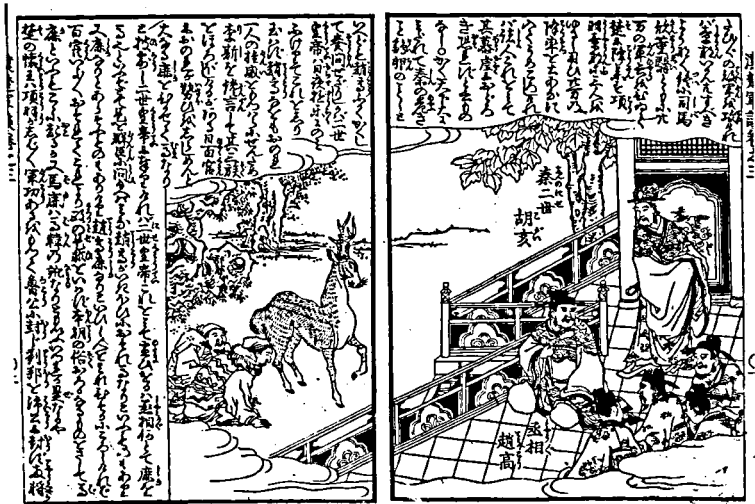
宗義誅殺ののち、信濃宮のもとへ使者に立った鐔田三郎は、初編には「津波田太郎忠政」(三十三丁裏)として登場した義仲の忠臣である。この局面では、宋義の誅殺を楚懷王に報告した桓楚の役回りを担っている。

◆義仲、兼安と争う 巻二③「項羽九戦章郎」

特にこの局面においては、原作と『漢楚義』との間で、個々の戦闘や人物の行動が、一対一で対応していない。ただし、義仲が桜間介良遠を討ち取り、その間に兼安が逃げ帰る一段(十四丁裏・十五丁表)は、項羽と涉間とが争う間に、章郎が逃走した戦闘に擬えたものようである。特に、本作における「乗つたる馬は名にしあふ、碓井の駿足なりければ」(十五丁裏)という一節は、『漢楚軍談』の「騎タル馬ハ鳥錐ノ駿足ナレバ」(十二丁表)という記述を襲用したものであろう。

◆長高、鹿を指して馬という 巻二④「超高指鹿為馬」

馬琴はこの局面に出現する鹿について、「もし角あらば欺くとも、誰か是を馬と言はんや」と書き入れている



【図1】『絵本漢楚軍談』巻3、1丁裏・2丁表（東大図書館蔵本）

（十七丁裏）。しかし、彼が編述した『絵本漢楚軍談』上編（重政画。文化元年、仙鶴堂刊）では、この場面の鹿には短いながらも角があり（図1参照）、右の記述は草双紙ゆえの「偏痴氣論」と思われる。

◆成良、死を賜る

巻二④「趙高指鹿」

本作の阿波民部成良は切腹に際して、自身が「韓非子」を学び酷刑を行ったことを悔いた（二十丁表）。これに対して「漢楚軍談」は、李斯が死の間際に次男へ向けて発した、「もう一度お前と一緒に、上蔡の東門の外で、兎狩りがしてみたかった」という主旨の言葉を、漢文のまま掲げる。この言葉は、『史記』李斯列伝に見えるものである。

◆宗盛、戦況を耳にする

巻二④「趙高指鹿」

・下駄上（第三冊）

◆兼通、都の内情を知る

巻二④「趙高指鹿」

秦長高は廬山の陣への使者として、自らの「従兄弟」である「尾並次郎五朝風」を遣わしている。原作におい

て、この朝風に相当する趙常は、「趙高ガ姪」(二十二丁表)である。

◆兼安、去就に迷う 卷二④「趙高指鹿」

◆芋川正雁、説客となる 卷二⑤「章邯避禍」

原作の陳稀に対応する「芋川江五郎正雁」は、里芋の異称「えご芋」を効かせた命名か。

◆頼朝、壹岐歴世を招く 卷三①「酈生使韓借張良」

◆頼朝、親良を借りる 卷三①「酈生使韓」

◇頼朝、平康頼を招く

本文中にも注記したように、「漢楚軍談」には陸賈・随何が劉邦に仕えた経緯は語られていない。平判官康頼が、この兩人に擬されていることは、自ら「随我道人」^{すいが}「陸賈居士」と号していることから明らかである。

◆仁田四郎、頼朝に従う 卷三②「望夷宮二世被害」

灌嬰は劉邦の忠臣として、生涯背くことがなかった。この点を考慮して、馬琴はやはり頼朝に忠実であった仁田忠常を、灌嬰に擬えたのであろう。

・下駄下(第四冊)

◆秦長高、宗盛を殺害する 卷三②「望夷宮」

◆長高、誅殺される 卷三②「望夷宮」

三十二丁裏・三十三丁表には、宗盛を殺めた長高が、「平家の遺迹を、相続」せんと目論み、束帯姿で「上段の間」に上ったところ、震動ゆえに転げ落ちる場面が描かれている。この画面に添えられた後藤兵衛の言葉にもあるように、右のごとき一件は「演義」(「西漢演義」)にも通俗(「通俗漢楚軍談」)にも記されていない。馬琴は「史記」にまで遡って、この筋立てを持ち来たったようである。ただし、馬琴がその出拠を「二世の本紀」(「秦始皇本紀」のうち)とするのは誤りで、趙高が篡奪を思い止まる一件は、「史記」の李斯列伝に見える。

長高が誅伐された際、その婿である後藤兵衛守長が逃走したことについて、三十四丁表の詞書には、「守長を取り逃がして、『盛衰記』の筋に合はせる、天の配剤天の責め」とある。原作の閻楽は、趙高の「三族」として誅殺されたものと思われるが、「漢楚賽」の守長は、逃

走後に身を寄せた重衡を裏切り、最終的には「縛り首をぞ刳ねられ」た（三十四丁裏）。『盛衰記』における守長は、一ノ谷から敗走する最中、馬を射られた主人重衡を見捨てて逐電し、生き恥をさらしたことになる（巻三十七「守長捨主」）。馬琴はこの展開を取り入れつつ、「縛り首」という末路を付加して、守長の身上における「勸善懲惡」を正したのである。

また、本作の宗盛に「入れ替へ子」が設定されているのは、『源平盛衰記』巻四十三「宗盛取替子事」に見える、宗盛を「清水寺ノ北坂ニ、唐笠ヲ張テ商ナフ」「唐笠法橋」の子供とする異説に基づく創案である。この伝説は、すでに本作初編の口絵（二丁裏・三丁表）や本文中（二十丁裏）でも言及されており、第二編における意表を突く展開は、すでに初編の段階で「欄柴」がなされていたわけである。

宗盛の出生にまつわる異説については、馬琴の随筆類にも言及が見出せる。

例せば宗盛公を傘張の子也とし、亦「文徳実録」

〔巻二〕に、嵯峨天皇を伊予国神野郡の沙門上仙が後身也とまうし、檀林皇后を橘姫が後身也とまうす説を載られたるが如し。みないにしへの小説なるべし。

〔燕石雜誌〕巻五下、二十八丁裏・二十九丁表
平大臣宗盛公をば、笠張の子なりといへり。その人暗愚なるときは、将相貴介の公子なるも、これを匹夫の子なりといひ、その人賢良英雄なれば、儒官、武士、匹夫の子をも、これを天子の落胤とす。世の褒貶は私議に起り、是非は成敗に依ること多かり。

〔兎園小説〕第七集「平豊小説弁」（*1）

馬琴は、「私議に起」こった「いにしへの小説」と判断した宗盛の伝説を用いて、原作における胡亥弑逆の局面で宗盛を延命させ、後段に予定される平家滅亡に備えたのである。

◆義仲、妹尾・難波の士卒を虐殺する

巻三④「范増算運観天文」

◆頼朝、兵庫の城を落とす

巻三③「沛公入関軍覇上」

文政十一年八月二十七日の馬琴日記によると、本編八の巻の浄書本を点検した際に、馬琴は改方名主が「嫌忌」を言い立てかねない箇所[※]に心付き、本文を書き改める一方、板元にも「口の半丁の画の進物類、御教書（*2）に直し候ふ様」指示を与えた。「口の半丁」とは、八の巻の冒頭半丁、すなわち三十六丁表の挿画のことと思しい。この画面では、上総五郎兵衛忠清（原作の韓栄）と老岐歴世（酈食其）との間に、書状と文箱らしきものが描かれているが、当初はここに頼朝（劉邦）からの「進物類」が置かれていたのであろう。

第四冊の見返しには、「一体二心の韓栄・朱蒯は、五百金のずつしり餌／迷はされたる迹水の武蔵ならぬ上総忠清走舟」と記されている。これは、韓栄・朱蒯の役回りを演じる忠清が、多額の「進物類」に迷わされて敗北し、兵庫から逃走する筋立てを説明したものである。「五百両のずつしり餌」は、『漢楚軍談』巻三の「千金ノ贈モノ」（十四丁裏）に対応するが、『漢楚賽』の本文中には、「此品々」や「種々の引出物」とあるばかりで、

「五百両」という金高は明示されていない。よって馬琴は、頼朝から忠清への五百両もの「進物類」が、賄賂めいた引出物としてことさらに目を引かぬよう、原作には見えない「本領安堵の御教書」の件を、校正の段階で急遽書き加えたのであろう。なお、史実の上総介（藤原忠清は、平家滅亡後に麻生浦で捕らえられて処刑されたが、本作はその最期に説き及んでいない。

三十六丁裏以下に名前が見える平山武者所季重は、すでに本編三十丁で仁田忠常と争い、原作における樊噲の役回りを演じた。兵庫の城攻めにおいて、季重は熊谷直実と共に搦め手を任されており、ここでは『漢楚軍談』における薛欧・陳沛に擬えられている。この季重と直実という組み合わせは、一ノ谷の戦いで先陣を競った二人の勇敢さ（『盛衰記』巻三十七「平山来」同所）を思い寄せたものであろう。

◆頼朝、福原に入る

卷三③「浦公入関」

三十七丁裏・三十八丁表の画面では、女官らしき人物が「傾城水滸伝」と掲き混ぜたら、こんな目にも遭ふ

まいのに、ホンニ辛い事じやのふ」と愚痴をこぼしている。これは、同じ馬琴の「傾城水滸伝」(豊国・国安画。仙鶴堂刊)を引き合いに出した滑稽であり、件の女は「これが「傾城水滸伝」であつたならば、もつとよい役回りが与えられたらうに」と、不平を漏らしているのである。同作は、「水滸伝」の登場人物を男女逆転させた長編合巻であり、本編と同じ文政十二年には、六・七・八の三編が同時刊行されるほどの当たり作であつた。

また、三十八丁表の本文では、大江広元が福原の内裏から「平家の記録」や「太政官の書冊」を持ち出して、来たるべき頼朝の治世に備えている。この筋立ても、原作の蕭何が、咸陽宮で「丞相府ノ図籍」を収めた一件(十六丁裏)の翻案である。

◆義仲、兵庫に迫る 卷三④「范増算運」

◆覚明、天文を見て危ぶむ 卷三④「范増算運」

◆内間田幸弥、義仲に密告 卷三⑤「項伯夜走救張良」

原作の曹無傷に対応する内間田幸弥は、「内股膏葉」を効かせた命名である。類似した名称の人物としては、

「南総里見八犬伝」第九十九回に登場する、小鞠谷如満こまぢやゆきみつの老党兎巷幸弥うちまたこうや太遠親たとほろかが思い浮かぶ。「八犬伝」第九輯上巻は天保六年の刊行なので、「漢楚賽」の内間田幸弥はこれに先行する。

〔注〕

*1 「燕石雜志」(文化七年、文金堂等刊)の引用は、慶應義塾図書館蔵本による。「兎園小説」第七集(写本。文政八年七月)は、新版日本随筆大成第二期1(昭和48年、吉川弘文館)を用いた。

*2 柴田光彦氏編「曲亭馬琴日記」第一卷(平成21年、中央公論新社)四二頁は「御散書」(傍点稿者。以下同)とする。早稲田大学図書館蔵の日記原本を、同館の「古典籍総合データベース」で確認すると、たしかに「散」字と見えないこともない。ただし、本作三十六丁裏の本文に「みぎやうしよ」とあるので、「御教書」と判断した。

(かんだ・まさゆき 法学部准教授)